

パラリンピックから学ぶ

パラリンピックが終わった。毎朝早く、例によって納豆オムレツを作り、食べながら観戦した。多様な障害をもつ、パラリンピアンたちの活躍ぶりを見て、感激し「なっとくしたものだ。

写真は朝日新聞 9月6日朝刊特集である。陸上選手として活躍し、現在はスポーツと社会をテーマに活動している為末大さんが「新しい自分と向き合う力」と題してコラムを書いている。同感するところも多く、途中から紹介しておきたい。



これまでパラリンピアンたちとトレーニングをし、取材もして感じたことは、彼らの優れた適応能力だ。生来の障害者ではなく、人生のどこかのタイミングで障害者になった選手たちは、最初は過去の自分とのギャップに苦しむという。走ることができない。つかむことができない。昔の自分ならできたことができなくなる。その苦しみの中で、スポーツと出会い、徐々にできないことよりもできることに目を向け、能力を高めていく。

目が見えない選手と車いすの選手がともに出かけることがあるそうだ。目が見えない選手が車いすを押し、車いすの選手が方向を示す。「あるもので協力し合えばいい」と、彼らは言う。道具はもちろん、仲間とも上手に連携しながら、新しい自分に適応している。

日本社会も似ているのではないか。世界第2位だった国内総生産(GDP)が3位に下がり、今後も下がり続けるといわれている。少子高齢化も進み、地方の疲弊も大きい。もう一度バブルの時代のようになる、と言うのは無理がある。むしろ新しい日本に適応し、価値観を変えるべきではないか。寛容な社会というのはどうだろうか。誰をも受け入れられるような価値観を持った国になれば、違う形で世界をリードできる可能性があると思う。最初に東京五輪が開かれた1964年の頃と比べ、いろいろと学んできた日本は「大人の国」になったのだから。

パラリンピックを始めたといわれるグッドマン博士のこんな言葉がある。

「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」

パラリンピックの奥深さはその言葉にあり、学べることも多い。

(2016年9月20日)